

いつか読んでみたかった
日本の名著シリーズ

石田梅岩 『都鄙問答』

tshidabokubito to hime no koto

現代語訳：城島明彦

全文をとことん 読みやすくしました！

227分で読めます (20代30代10人平均値)

いつか読んでみたかった日本の名著シリーズ04

石田梅岩『都鄙問答』

〒105-0003 東京都港区西新橋二丁目8番1号

平野技術士事務所 代表 平野輝美

☎/FAX 03-3504-2600 携帯電話 090-3694-7864

http://www.ce-hirano.com

教知出版

教知出版

「都鄙」という字を初見で問答を入れずに「とひ」と読める人はそう多くはないだろう。「近鄙な村」というときの「び」だが、「ひ」とは読みづらい。だが、「ひな」と読める人はたくさんいるはずだ。「ひなびた村」というときの「ひな」という漢字なのだ。つまり、「都鄙問答」の「都鄙」は「都会と田舎」「都と地方」という意味である。

「都鄙問答」(四巻)は、江戸中期に活躍した、石門心学の創始者、石田梅岩が、門弟たちや士農工商の格を超えて多くの人たちと交わした質疑応答を一冊にまとめた「修養書」だ。私塾を開講して十年後の元文四(一七三九)年七月、五十五歳のときに刊行された。それに先立ち、梅岩は、主だった門弟五、六人を連れて城崎温泉で編集合宿を行った。田舎から上京して梅岩を訪ねてきた人との問答が多かったため、当初の書名案は「田舎問答」だったが、合宿時の門人の提案で「都鄙問答」に変更され、じやれた感じに変わった。

都と田舎

梅岩は号で、名は興長、「都鄙問答」の巻末に記された勘平は通称である。石田梅岩と石田勘平は、丹波国桑田郡東郷村の農民の子として生まれた。石田家は「中農」で、地元では田家として知られていたといわれている。厳格だった父の名は権右衛門、母の名はたね、三人兄弟(二男一女)の次男である。

丹波国は現在の京都府亀岡市にあたる。亀岡市は京都府の中西部に位置し、京都市、宇治市に次ぐ三番目に大きい都市だが、梅岩が生まれた村は、現在東別院町東掛と呼ばれる山間部にある。梅岩没後に高弟の手島堵庵がまとめた「石田先生事跡」の表現を借りると「前後山せまりたる所なり」とされる山村だった。今では亀岡から京都市まで電車で三十分以内、バスでは一時間少々でいける。電車の走行距離にしてわずか二十キロメートルの近距離である。昔も、大都会の京都は遠か彼方という感覚はなかったのだ。そう考えると、書名に「都鄙」とつけた意味合いも理解できる。

禅僧と出会う開眼

石田梅岩が動くのは三十五歳頃からだ。「本性とは何か。それを知りたい」と、仕事の合間を縫って京都市中に居住する儒者たちの講義を聴いて回るようになる。だが、どの儒者の教えも梅岩の眼鏡にかなわなかった。そんなある日、「この人しかいない」と思える師とめぐり合う。小栗了雲、黄檗宗の僧である。同じ禅宗でも、臨済宗や曹洞宗が鎌倉時代に始まったのに対し、黄檗宗は江戸時代に始まった禅宗である。了雲の話を聞いて「それまでの疑問がすべて氷解した」と梅岩はいつている。

梅岩は了雲の指導の下、自分を磨き続け、ついに「悟りを開く」高みにまで到達するのである。その間の経緯が「都鄙問答」(巻之二)に記されている。

呉服商を辞めて私塾を開講するのは享保十四(一七三九)年、四十五歳のときである。何月に開講したかは記録されていないが、この年の秋(十月十九日)に凌雲が没していることから、その後と考えるのが自然だ。「月謝は無料。紹介者は不要で、誰でも歓迎」とした案内書きを門前にかけた公開講座で、梅岩以後もこの方式が継承された。講義用の教材に使われたのは、「四書」「大学」「中庸」「論語」「孟子」「孝経」「小学」「近思録」「性理字義」などの儒学が中心で、古田兼好の「徒然草」などの国学も使われた。この講義とは別に月に三回ほど開かれる「月次会」と名づけた集まりも催された。

石田梅岩『都鄙問答』

著者	石田 梅岩
訳者	城島 明彦
発行所	教知出版
発行所	教知出版
発行所	教知出版
発行所	教知出版
発行所	教知出版
発行所	教知出版
発行所	教知出版
発行所	教知出版
発行所	教知出版

© Akishiro Josuna 2016 Printed in Japan
ISBN978-4-809-1126-1 0026
ホームページ <http://www.chikido.jp>
Eメール books@chikido.jp

『都鄙問答』石田梅岩

商人の道を問うの段

「いい買物をした」と思われる商品を売れ

「問」ある商人「私は、いつも品物を売ったり買ったりすることを生業としていながら、商人としての正しい道の意味をよく理解できずにいる。主にどんな点に注意して商人として世渡りしていけばよいのだろうか」

「答」遠い昔、自分のところで余った物を、不足している物と物々交換することで相互間に流通させたのが、商人の発祥のことだ。商人は、銭勘定に精通することで日々の生計を立てているので、一銭たりとも軽視するようなことを口にしてはならない。そうした日々をこつこつと積み重ねて富を貯えるのが、商人としての正しい道である。

その場合の「富の主入」は誰かという点、世の中の人々である。買う側と売る側という立場の違いはあっても、主人も商人の自分も互いの心に違はないのだから、一銭を惜しむ自分が気持ちから推し量って、売り物の商品は大切に考え、決して粗末に扱わずに売り渡すことだ。そうすれば、買った人も、最初のうちは金が惜しいと思うようなことがあっても、商品の上さが次第にわかってくると、金を惜しむ気持ちはいつの間にかなくなるはず。金を惜しむ気持ちが消え、いい買物をしたという思いへと自然に変わるのである。しかも、天下の財を流通させることで、世の中の人々の心や生活を安定させることにもつながるので、天地に季節がめぐって万物が生育するのと相通じるものがあるといつてよいのではないか。

そのようにして富が山のように築かれたとしても、その行為を欲得というべきではない。昔武左衛門尉藤綱（北条時頼に仕えた鎌倉時代の武士）が、欲得からではなく、世の中のために一銭を惜しんで、川に落としたり十銭を探させるために五十銭を費やした有名な故事の意味をよく吟味することだ。そのようにすれば、国のお達しである倂約令に過い、天の命にも合致して好都合で幸せになれるだろう。自身の幸福が万民の心を安心させることにつながるなら、それこそ、世の宝。とても呼ぶべきで、天下泰平を祈願するのと同じ効果がある。

いわずもがなのことではあるが、商人は、国の法をよく守り、わが身をよく慎まなければならぬ。商人といえども、人としての道を知らずに金儲けをし、しかも不義の金を儲けるようなことがあつては、やがては子孫が絶える結果を招きかねない。心底から子孫々々を愛する気持ちがあるなら、まず人としての正しい道を学んで家業が栄えるようにすべきであろう。

平野野村 代表 平野野村 事務所
〒105-0003 東京都港区新橋一丁目8番1号
TEL 03-3504-2600 FAX 03-3504-7864
http://www.ce-hirano.com

人間性を磨く学問

石田梅岩の思想を「石門心学」と呼んだのは、中国の「心学」と区別するためだ。南宋（一一二七～一二七九年）の陸象山（陸九淵）や明（一三六八～一六四四年）の王陽明の思想を「心学」と呼んだことから、それと区別するために「石田梅岩一門の心学」という意味で「石門心学」というようになった。南宋の思想家である朱子（朱熹）が「経書の解釈」を重視し、「性即理」を唱えたのに対し、同時代の陸象山は「心の内省」を重視して、「心即理」を主張。その思想を引き継いで、「陽明学」として完成させたのが王陽明である。

「心学」とは、書いて字の如く「心の学問」だ。つまり、「自分の本心を見つめ、人間性を磨く修養学」である。梅岩は「盡心知性」（心を盡して性を知ること）といっている。「盡」は昔の字で、今の字では「尽」だ。そして、知性の「性」は人が生まれながら備えているとされる「本性」のことである。「心を尽くして本性を知る」ための手本にするのは、中国古代の伝説の聖帝である堯や舜であり、儒教の祖である春秋時代の孔子（紀元前五五～四九一年）や孔子の道を継承発展させた戦国時代の孟子（紀元前三七二～二八九年）に代表される聖賢たちの言動だ。「盡心知性」は、その孟子の言葉である。「人の本性は善」とする孟子の「性善説」が石田梅岩の思想の根幹をなしている。

石門心学の三つの特徴

石門心学の特徴は、大きくいうと次の三点になる。

- 第一点は、儒教・仏教・神道を融合するという従来の大膽で斬新な発想をした。
 - 第二点は、「道徳」・「身正を修めよ」でわかりやすく説明し、幅広い層に受け入れられた。
 - 第三点は、商人の儲け（利）を武士の俸禄と同じだと主張し、商人の地位を高めた。
- 商人は、士農工商という身分制度の一番下に位置づけられていた。その理由は、賤商思想による。支配階級の武士は別として、同じ庶民でありながら、農民は汗水を流して米を始めとする五穀や野菜などの食料を生産し、工人は家具や食器などの生活必需品を汗水流しながら生産するのに対し、商人は彼らがつくった物を右から左へ流すだけで利益を得ていくとみなされたからだ。

商人に対するそうした偏見は不平等だと石田梅岩はきき取りと否定。商人が商売で利益を得ることは、武士の俸禄と同じだ、と主張したのである。その代わり、商人は課税化したりせず、誰からも後ろ指を指されない「商人道」に則つて正々堂々と商売し、世の中のため、人のためにつくさなければならぬと説いた。梅岩が農民の出であり、しかも数十年前に及ぶ商人体験があることから強い説得力があり、京都を中心とした商人たちから強い支持を得た。梅岩の信奉者は、手島瑞庵、中沢道生、柴田勘右衛門等の活躍でどんどん増えていった。

石田梅岩は、生涯独身だった。なぜ妻子を持たないのかと何度も問われたようで、没後に弟子が編纂した『石田先生語録』や『石田先生事蹟』にその答えが載っている。

「妻子という小事によつて、大道を教えることに支障をきたすのではないかと考えて、独身を貫いているのだ」

世のため、人のために献身し続けた六十年の生涯だったのである。